

## 西行伝承の東と西

—「西行と熱田宮」「西行と亀」「西行のはね糞」  
「いちご問答」をめぐる—

松本 孝三

はじめに

実在とかけ離れ、旅にあつて歌問答に敗北し退散する西行伝承は常に機知と笑いに満ちており、それらは全国に広く分布しているが、東・西の視点から考えたことはほとんどないであろう。歌人・歌聖といった実像、あるいは実像に近いと信じられてきた西行に対して、伝承される西行は我が国の文化・文芸・民間伝承の中に今日まで脈々と語り継がれてきた。そこで私なりに西行伝承を簡単に定義すれば、「笑いを求める世界」に生きる西行像ということになるうか。伝承に生きる西行は、いわゆる「西行戻し」に象徴されるような、旅先で出会う人々にさまざまに歌問答を仕掛け、その結果敗北・退散を余儀なくされ、笑われる存在として語られて来たのであつたが、そんな西行になぜか人々は親しみを抱くとともに、新しい生活を切り開くための夢を託していたのではないかと思うのである。

—「西行と熱田宮」—作業唄に歌われる西行—

花部英雄氏は西行伝承について①「旅の西行」系、②「西行と盗み」系、③「西行と女」系、④「草子・狂歌咄と西行」系に四分類し、①「旅の西行」系として、今回取り上げる「西行と熱田宮」「西行と亀」「萩に跳ね糞」や、「夏枯れ草」「桶閉じの花」「蕨と檜笠」「猿ちご問答」といった話型を掲げる。そのうち西行の名に託<sup>かか</sup>けて東西を象徴的に表現しているのが、北海道と沖縄地方を除き全国に広く分布する「西行と熱田宮」である。『日本昔話通観』第二十八巻「昔話タイプインデックス」<sup>②</sup>には「西行が涼しい熱田の森を通り、これほどに涼しきこの宮を熱田の宮とは誰が言う、と詠むと、熱田宮が、西行とは西行くと書いて東行くとはどこ行く、と詠み返す」とある。これは熱田の神との歌問答に負けた西行がそそくさとその場を退散したといった体のものであるうが、そこには〈東⇄西〉〈熱い⇄涼しい〉をめぐる西行と神との狂歌問答といった、言葉遊びの面白さが窺える。岩手県の『遠野の昔話』<sup>③</sup>から一例を示そう。

西行と熱田の宮（遠野市青笹町 奥寺キセ）

西行法師どいう諸国修行して歩<sup>ま</sup>つてる人あつたんだつて。ずうつと歩<sup>ま</sup>ぐうぢに、それ、熱さの宮さ行<sup>ま</sup>つて昼寝したんだ。ところが、西さ向いでも風が吹く、東さ向いでも風が吹ぐんで、

「これほど涼しいお宮、だれが熱さの宮と付けた」て言<sup>せ</sup>つた

んだどス。すたどころが、そこに婆はさまいで、

「これこれ、法師さん、お前めさん、賢さかし人だと思つたら、物の譬たとえどいふもの知らねのが」

「どいうわけだ」

「熱さの宮だたて、ほんとに熱くていうんでねんだ。一羽の鳥も鶏、一づもらつても饅頭、一枚でも煎餅あおい、葵あおいの木にも赤く花が咲ぐ、白いどいう字も墨で書く」て言れで、さすがの法師も負けでしまつたどさ。どんどはれ。

ここには名前をめぐる東と西の対比はないが、歌修行の西行の無知を見事にさらけ出している。熱田宮を「これほど涼しいお宮、だれが熱さの宮ど付けた」と皮肉る西行に婆はさまが窘たしなめて言った「一羽の鳥も鶏、一づもらつても饅頭、…」の譬たとえはいわゆる無理問答である。無理問答とは「奇抜な難問に対して簡潔巧妙に受け返す頓知的問答をいう」<sup>(4)</sup>とある。こんな頓知の利いた言葉遊びを駆使して西行を笑おうとしているのである。『遠野の昔話』には他にも、舞台は熱田宮ではないが、西行が旅人から、笠に「西行」と書いてあるのになぜ東へ行くのかと訊かれ、こちらは攻守入れ替わつて、西行が同様の無理問答で言い返す話がある。これもやはり「西行と熱田宮」を下敷きにした話であつたらう。

このような「西行と熱田宮」が地搦唄や木遣唄、音頭口説などでも盛んに歌われていた。長野県北安曇郡に伝わる地搦唄は次のようである。<sup>(5)</sup>

西行法師といふ人は 始めて都へ上る時 熱田の宮にて昼寝して これほど涼しい森なるに 熱田の宮とは誰たが名をつけた そこい神主とんで来て これこれ法師や何をいふ 熱田の宮とは名であるぞ 物のたとへでいふならば 一つのものでも煎餅と 一つのもので饅頭と 一つの橋でも日本橋 白いといふ字も墨で書く さんようさんよう

これと同内容のものが岐阜県揖斐郡藤橋村の音頭口説にも歌われていた。また、長野県木曾地方に伝わる「木遣唄」には次のようなものがあつた。<sup>(7)</sup>

西行法師と言ふ人は 西へ行くべき筈だのに 何故東へ来るぞい よいとこ西行へ

これは西行の名による西と東の対比の面白さをそのまま歌い込んだものである。愛知県や三重県、福岡県などにも同様の例があり、他地域でも木遣唄・地搦唄といった作業唄や盆踊り唄などで広く歌われていたようである。「西行と熱田宮」はこうした言葉遊びの面白さを核にして歌われ、全国に広まつて行つたものと思われるのである。

白田甚五郎氏は『歌謡民俗記』<sup>(9)</sup>の中で、「地搦きの作業は、(中略)仕事の辛気さから、綱の衆の気持を高揚させる為の手段」として西行歌が一世を風靡した時代があつたと言つた。また、「さんようさんよう」といった囃子詞について、「西行の音がサンヨーに似てゐる所からも西行が此作業の方面に人気が出たのであらう」との見解を示していた。

ここで、歌われる西行と言うと広く関東から東北地方に知られる「渡り職人サイギョウ」の存在が気になる。永井義憲氏は早くに「西行のはね糞」に閲して、「歌僧としての西行にまつたく似合わない哄笑をさそう卑猥な笑話を好んで語ったものは、あるいは他からはサイギョウとよばれ、自らもサイギョウという、この一所不住の職人たちがあつたのではなからうか」と指摘している<sup>10</sup>。また、須藤豊彦氏は作業唄に歌われる西行について、「いづれ世間に流布してゐた西行伝説の知識を木遣歌として仕立てたものであらう」とし、「木遣歌を支へた人たちにとつてみれば、西行は確かに身近な存在として生活の中に生き続けてゐた」として、西行が庶民文芸としての木遣唄・地搦唄と深く関わっており、それに携わつた鳶職人の存在に言及している<sup>11</sup>。

その後、これに沿うかたちで西行伝承と渡り職人サイギョウの関係を論じたのが花部英雄氏である。氏は、調査報告書や江戸時代の文献<sup>12</sup>等を踏まえながら、「渡り職人サイギョウ」と称される人々によつて西行が木遣唄、木挽唄などで盛んに歌われて来たことを再確認し、それらが「大工・木挽きなどの渡り職人サイギョウの流れを引いている」と述べる。そこからは西行伝承研究の新たな方向性が期待できよう。しかしながら、「サイギョウ」の呼称とその具体的な活動については、今のところ関東を中心とした東日本に限定されており、西日本においては未だ確認されていないようである。

ところで、なぜ西行と熱田宮とが結びつくのか。そのことに

ついでには小林幸夫氏の熱田の法楽連歌の見解が参考になる<sup>14</sup>。小林氏は、熱田神宮における神官や連歌師による法楽連歌の席において、その座興として「西行と熱田宮」の狂歌問答がもて囃され、それが神を讃える法楽のわざでもあつたと言う。つまり、伊勢神宮を敬慕した西行だからこそ熱田の神との歌争いの相手にふさわしく、しかも歌問答に敗れ、尻からげして逃げる西行のヲコなる振る舞いを熱田の神は悦ばれたと言うのである。その背景には近世初頭、熱田神宮に参集した神官や連歌師によつて盛んに連歌会の催しが行われていたことが思われよう。その座興として人気を博したのが西行であつたというわけである。そこで語られる西行は、花部英雄氏が言う如く、すでに実像からかけ離れた「別論理仕立ての西行像」であつたに違いない。

## 二 「西行と亀」 「西行のはね糞」——くそ話の意味するもの——

次に「西行と亀」と「西行のはね糞」について見ていく。これも『日本昔話通観』<sup>16</sup>で各々の概略を確認しておこう。「西行と亀」は「西行が、たれた野糞の動くのを見て、西行もいくせの旅はしてみたが糞の四つ這い今日が見はじめ、と詠むと、糞をかけられた亀が、忘れても昼寝はすまい道ばたに駄賃取らずの重荷負うかな、と返歌をする」、また、「西行のはね糞」は「西行が、萩の上に野糞をたれると、萩がはねて糞がかかり、西行はいくらの旅もしてみれど萩のはね糞いすが見はじめ、と詠む」とある。いずれの場合も旅中の西行の野糞が引き起こす狂歌話

と言へる。まず京都府船井郡和知町の例を示そう。<sup>17)</sup>

西行の歌（広野 片山忠七）

西行さんが山道をお通りになりよつた。そしたら、えらい穢い話ですけれど、西行さんがせんちい行きとうなつたつて。こりゃあしとつう、ここでせんちい行かなあしやない。

ところがその山道に雪が降つとつてえ、萩がそこにしやあとしおれて下がつとつたつて。そえでえ、西行さんが糞こかはつたら、萩がぬくもつて、ぴいんと雪が消こえて上へ上がつてもただ、萩が。そした西行さんが、そこで曰く、

『西行も、いくらの旅はしてみれど、萩のはね糞今日が見はじめ』つて言うて、まあそこで言うといて、それからまた西行さんは、とんとん今度行つて、今度は川原い行かはつたつて。川原い行つたらあ、またそこでえ便所へ行きとうなつたつたつて。そいたら、こりゃあこりゃ美しい岩じゃあ。はあこの岩の上で一遍便所したら、せんち行つたら具合よかろうと思うて、そこでせんち行かはつてやはつたやんやて。そうしたらその糞が、バタバタバタバタ、四つ這いよつたつて。這うも無理か、そこに石亀の上にこかはつたんやて。はあ、そこで西行さんの曰く、

『西行も、いくらの旅はしてみれど、糞の四つ這い今日が見はじめ』つて言うて通らはつた。

ここでは一人の語り手によつて続けて語られているが、全国的には個々に語られる場合も多く、亀が蛙や蟹になつてゐるも

のもある。また、西行に対して亀が狂歌で言い返す、いわゆる狂歌問答のかたちをとるものも多い。いわば「糞」を題材として、西行と亀・萩をめぐる機知に富んだ狂歌話の面白さを楽しむものだったのであろう。ただ、全国的に人気があつた西行話にも拘らず、その展開や狂歌自体に特徴とか地域性といったものがそれほど見られず、内容的には実に単調な話柄であると思われる。

そこで、あらためて両話を見てみると、まずは「糞」がテーマであると言へるであらう。しかし、なぜ「糞」なのか。そこからは稲田浩二氏が早くに注目していた「とりの話」が思い起こされる。『日本昔話事典』の「とりの話」の項には「中国地方・近畿地方を中心に、とりの話とはその座の話のしまいの話ということである。これは広義の形式譚と考えられる。とりの話にはしばしば西行話が用いられる」とあり、「西行と亀」「西行のはね糞」の話が、西日本の滋賀県・福井県・岡山県・鳥根県においては昔話の語りの場で最後に語る話としても機能していたと言う。「広義の形式譚」とは昔話の結末句との共通性を指摘したものであろう。いわゆる「くそ話どり」ということである。続けて、このような狂歌まがいの歌や下がかつた西行話が村々を歩いた狂歌師などによつて各地へ伝播し、また、村の文芸好みの人士によつて和歌や文芸に縁の薄い農民たちにも喜んで迎え入れられたと言う。地域的な片寄りは見られるが、恐らくはそのような状況の中で、これらの話が昔語りの場などで

最後に「くそ話」としての機能を發揮し、大いに座を盛り上げて来たことが思われるのである。

ところで、右の狂歌を見ると、いずれも下の句に「今日が見はじめ」とある。全国の資料を見てもそのほとんどに、「見るが初なり」「これぞ見初め」「これは初なり」「これが初めて」「今はじめなり」「今が見初め」「今度初めて」といった言い方が確認できる。なぜこれほどまでに「糞」にまつわって「初め」という言葉が強調されるのか。そこには重要な意味が潜んでいるようである。それは民俗学的に言えば、不浄な存在である「糞」を歌に詠み込むことで、次に来るべき「初め」という表現に象徴されるような、新しいハレの次元へと状況を転換させる効果を期待したのではないかということである。例えば次のような話はどうか。野村敬子氏の「産屋の夜伽」<sup>19</sup>からの引用である。

むかし。西行はん、旅しはつて。ある時な。眠りました。寝しなに夜糞がしとうなつたんですわ。そして、大け石の上のつて夜糞しとつたところが、何やそれより揺れはつて、もの言います。

「西行よ。幾重に旅もするけれど。糞西行とはこれよ如何にか」言はつた。見たら大きい亀が居りましたんや。西行はん

「道端や。昼寝の旅も多けれど、駄賃取らねば錢ものせへん」と言いはつて。亀のつそのつそと揺ぐれて、しゃないそれ落したいうて。

話自体に混乱が見られるようで、夜と昼の判断をし兼ねるし、狂歌にしても西行と亀のどっちが詠んだものか判然としない印象はあるが、「西行と亀」の話であることは間違いない。この話は野村氏が滋賀県栗東市北中小路・円光寺のご住職である高橋紅蓮尼という高齢の尼（調査当時九十歳）から聞いたもので、紅蓮尼はその生涯をほとんど旅に暮らした廻國の宗教者であつたらしい。そして注目すべきことは、紅蓮尼が「産屋の」夜伽に雇われて火焚きし、昼労働をする夜伽の女たちの夜を代行した様子であつた」とあり、さらに、この話を語る「老尼の口元は、かつて眠気醒しに語つたという、産屋をわかせた尾籠な話を忘れてはいない」と述べている。つまり、産屋の夜伽においてこのような西行話が語られていたというのであつた。産屋とは妊産婦が籠り、命を賭して新しい生命を誕生させる場であるが、そこはまた死と隣り合わせの、生命力が極度に衰え、異界からの危機に晒される時空でもあつたとされる<sup>20</sup>。そのような局面を打開する語りの一つとして、西行の糞の話が笑いを伴つて語られていたという例であるが、これもまた、出産という危機的状况を脱し、新しい次元へと転換させるための、いわばくそ語りの力だつたと言えるであらう。

### 三 「西行と亀」——本島と南西諸島の違い——

これらの昔話が、内容的にほとんど変化が見られない中で、本土と大きく異なるのは南西諸島の場合である。まず「西行の

はね糞」が九州・沖縄地方では全く聞かれない。また、唯一沖縄地方に伝承される「西行と亀」が西行の名では伝わっていない<sup>21</sup>。そのことは、これらが本土からの伝播であることを端的に示すものであろう。沖縄県北部・国頭地方の話を紹介する。

山原旅と山亀（国頭郡東村 久高将亀）  
やんばる

那覇あたりの人が、この山の所に来てから、山で、便をしに行つたそうだよ。山の亀がおるだろ、それ、こつちにおるの分からず、それが上に、糞たれたら熱いだらう、糞は。亀は、起き出してから歩いたそうだよ。

「はらつ、この、山の中の、糞は歩く。はらつ、はらつ。」  
してからも、びっくりしてから逃げたそうだよ。それから、歌も作つてあるそうだよ。

へ山原ぬ旅や 幾たびんさしが（山原の旅は、幾たびも  
しただけれど）

糞ぬ歩ちゆしゃ 今度初みー（糞の歩くのは、今度初めてだ）

と、歌も作つてあるよう。あれ知つておるだらう。「山原ぬ旅」というのは、この山の所の国頭には、なんべんも来たそうだが、この糞が歩くのは今度初みという、あの歌よう。

那覇の人が山原地方へ旅の途中、山中で便意を催し、知らずに亀の背中に用を足すと糞が動き出すので、驚いて歌を詠んだというのであるが、沖縄らしく八・八・八・六の琉歌のリズムになっている。琉歌としても広く歌われていたようである。報

告書には「山原と団亀」と題されるものも多いが、本土の「西行と亀」と内容的にはほぼ同じである。また、亀が返歌をする例はわずかに「大宜味のむかし話」に一例、旅人に対して亀が、「道端で、ほろをすゐもぬやあらん 重に、うふあさりていしくくあわり」（共通訳は松本による）と嘆きの琉歌を返したものが認められる程度である。その一方で、山原旅をする人の顔ぶれを見ると、本土における西行と違って実に多彩である。数多い報告書の中から目についたものを掲げてみよう。

那覇あたりの人／首里城の山の係（林地奉行）／船を持つた商売人（薪の商売）／島尻の人／別の国の人／帆船で山原へ旅する人／船頭・博労（牛買い）／ある人／首里の侍  
／平敷屋朝敏／唐の人／女の人 ほか

こうしてみると、その多彩さも然ることながら、そこにはかつての生活実態が反映していたと見ることが出来る。沖縄には祝福芸をもって沖縄各地を廻つた芸能者である京太郎や民間宗教者の念仏者などの存在が知られているが、その一方で、こういった首里の都から来る役人や商売人・船乗りなど、島尻と山原を往き来する人々によつても、本土でよく知られた「西行と亀」の話が新たに山原旅の笑話として仕立てられ、琉歌にも歌われて沖縄本島に伝承されて行ったものと思われるのである。

#### 四「いちご問答」——東北と山陰の「西行と子ども」譚——

最後に「いちご問答」を取り上げてみたい。この話は現在の

ところ東北地方の宮城県・山形県・福島県と中国地方の島根県からのみ報告例があり、地域的に相当な片寄りが見られる。しかもそれぞれの地域における特徴とも言えるものが顕著に窺えるようなのである。はじめに宮城県の『篁岳のむかしばなしと伝承』<sup>(26)</sup>から紹介しよう。

西行戻しの松(石) (篁峯寺藤本房 志子田宥恭)

〔前半部〕歌作りの修行で遠田郡涌波の篁峯寺へ問答にやって来た西行は、ある集落で娘たちと「麦問答」をする。その出来栄えに感心しつつ、風景を眺めている。〕

しばらく眺めていると、五、六歳の男の子が、なにか一生けんめい、取っては口に入れ、取っては口に入れてしているので、

「これこれ坊や、何を取って食べているの」。その子供が言うのには、

「一口に入るに足らざる草の実を越後食うとは何をいうらむ」と、言ったので、法師は大いに驚き、この幼い子供と、先ほどの娘たちといい、歌心ができている。この子の親たちなら、もつともつとすばらしい達人であろう。これではとても、たち打ちなどはできない。もつと修業をつんで、再びこの山に登ってみよう。そう心に盟って、下山することに決めた。

〔この後、錫杖が当たり穴が開いた大石を「西行戻しの石」と言うようになった。〕

これは文字通り、子どもとのいちご問答による「西行戻し」と言えるが、なぜ西行が男の子の歌に驚き、感心したのか分りづらいものがある。歌の意味は「一口で食ってしまえるよう なちっぽけな苺を越後に例えるとは一体何を言うやら」と解釈できようか。それならば、これは苺に越後を掛けた無理問答と見ることが出来そうである。それで西行は退散してしまうのである。

小堀光夫氏はこの話について、「一山で知行を貫いながら衆徒より低い地位にあった禰宜(修験)を俗聖としての西行に見立て、衆徒との歌のやりとりが、ここでの「西行の歌」の記事内容となつている」として、「その伝承は、篁岳一山の結果、境界といった性格とともに、一山の組織をみだす他山支配となつた修験を追放した事件を暗示している」と見る。<sup>(28)</sup>つまり、篁峯寺という聖地に対して他者を排除する意図がそこにはあつたようなのである。しかし、それだけではあるまい。やはりこの話には、無理問答によつて西行を退散させるといった言葉遊びの要素が色濃く反映しているとも考えられることも可能であろう。

次に山形県のもの掲げる。居駒永幸氏が『山形民俗』第二号(昭和六十三年)に紹介したもので、その出典は「古里のむか志」<sup>(29)</sup>(昭和五十五年、寒河江地区老人クラブ連合会編)である。居駒氏がその内容を簡条書きにしたものを示す。

#### 西行戻しの涙坂

①西行法師が慈恩寺に行こうとして、西覚寺の地で若い百

姓と出会う。

②若者に「何しに行く」と尋ねると、「冬萌えて夏枯れ草を刈りに行く」と答え、法師はその意味が解けなかった。

③法師は、しばらく行くと、木苺がたくさんあるのを見つけて、遊んでいる子どもたちにあげようとする。

④子どもは見向きもしないで、「腹のたそくにはならぬ、いちげるとは誰かいふらん」という歌を返す。

⑤法師は、この土地では百姓や子どもでさえこれほどの歌をよむのだから、慈恩寺に問答に行っても勝負になるまいと思ひ、引き返すことにする。

⑥法師はもとの坂のところまで戻ってきて休み石に腰かけ、失敗を恥じて涙を流す。

⑦それ以来、この坂はいつもじめじめして乾くことなく、誰言うことなく「西行戻しの涙坂」と言い伝えられるようになった。

⑧この伝説に出てくる百姓の若者と子どもは、慈恩寺の花山肴朝氏の屋敷内に祀られている知恵地藏尊の化身ではないかとも伝えられている。

こちらは所変わって寒河江市の名刹・本山慈恩寺が舞台である。この場合も西行は若者との「麦問答」の後、慈恩寺へ問答に向かう途中、木苺を子どもにやろうとすると、見向きもされず、(腹の足しにもならない小さな苺をやる)と一休誰が言うのかと歌を返される。この歌意も分かりにくいが、居駒永幸氏の翻

刻による慈恩寺・櫻澤坊の「小板地藏菩薩縁起書」に右の西行話の元になったと思われる記述があり、そこには知恵地藏尊の化身とされる童子の一首として、「ひと口に喰ふにもたらぬ草の実を苺子くへとは僧のあやまり」とある。居駒氏はこれについて、「苺」が「一語」「二期」と掛詞になつており、「ひと口ではとても言い尽せない深遠な仏法の教えを、一語で言え、あるいは一期で修めよとは、およそ間違つた考えで、仏門に仕える身としてはあまりに修業が足りぬというものだ」と、童子が西行をたしなめた歌<sup>(31)</sup>と、見事な解釈を加えている。そして、この西行伝説の語り手が慈恩寺関係の人々であつたと推測し、小板地藏菩薩の縁起として地藏堂參詣の人々に語られたものであらうと言ふ。その見解を是とした上で私は、この場合もやはり、苺と一語・一期をめぐる西行との無理問答を楽しむ世界がそこにはあつたものと考えてみたいのである。

今度は福島県のものを示そう。『会津の傳説』<sup>(32)</sup>から当該部分を引用する。なお、省略部分の内容を「」に略述した。

#### 西行法師の戻り橋(渡部正光)

昔、西行法師が、諸国行脚の途次、ここ会津の小平湯に、兼載という有名な歌詠みの人のいることを聞き、ぜひ逢つて歌比べをしたいと尋ねて来た。松橋の村を過ぎ小平湯へ行く途中の小さい川に差しかけたところ、橋のところ子どもたちが三、四人「いちご」(野苺)を食べて遊んでいた。西行法師は「いちご」はうまいかと話しかけたとこ

ろ、一人の子どもが、

今をだに口にも足らぬ草の実をえちこ（越後）食うと  
はおかしそうさん

と歌で返事した。

〔これに対して、西行と子どもとの間で「天竺」の歌をめぐる  
問答譚が語られ、〕

これを聞いた西行は、このような子どもでさえかく歌を詠むところでは、師の兼載は恐らく前代未聞の歌詠みに違いない。会つてもかなわないうと、そこから戻った。その橋を西行の戻り橋という。

〔さらに西行は、三、四人の子どもと「土の上」の漢字問答の後、これでは師の兼載にはとてもかなわないと戻って行った。実はこの子どもが兼載であった。〕

この話は猪苗代湖畔の小平濁天満宮こひらがたにまつわる話として伝えられている。そこは室町時代に連歌師として活躍した猪苗代兼載生誕の地であった。天満宮の申し子とも伝えられる兼載の少年時代のエピソード風に西行との「いちご問答」を展開しているのである。その時代設定は荒唐無稽であるが、花部英雄氏によれば、この話自体は「西行戻り橋」伝説に寄り掛かって構成されたものであろうという<sup>(33)</sup>。ここで問題なのは少年兼載の歌である。ひとまず（一口にも足らない小さな母なのに越後食うとは変なことを言う坊さんだ）と解せよう。母と越後を掛けた宮城県の例と似ているが、山形県のものとの表現上の共通性も窺

える。そこで、居駒氏が山形県の例で鮮やかに解釈したように、これらを「ひと口ではとても言い尽せない深遠な仏法の教え」を教訓的に歌ったものと解すれば、東北の三例は、いずれも同じ意図をもって歌われていると捉えることが可能であろう。すなわち、「いちご問答」の話は「西行と子ども」を話の枠に、仏法の深い教えを狂歌仕立てにし、西行が子どもを相手に問答で敗れ、退散する「西行戻り」の話として語られたものだったと言えるのである。

このように、東北地方に伝わる「いちご問答」の場合は、それぞれの土地の主要な神社における唱導や修験者、連歌師などの活動の場で「西行戻り」と「母の無理問答」譚が共有されるのである。

ところが、同じような「いちご問答」の西行話が東北地方からは遠く離れた山陰の島根県にも伝承されていた。東北のものと異なり、ここでは西行自身が幼な児として登場する。『島根半島漁村民話集（I）』―御碕・宇龍・鷗岬・鷺浦・猪目・河下<sup>(34)</sup>―から例話を示そう。題名は「西行と亀」であるが、「いちご問答」に該当する箇所のみを掲げる。

#### 西行と亀（宇龍 木村弥一郎）

それからあの、西行法師ね、あれは、とてもえらい人のほうさんですけどね、小さい時にね、お母さんの背に負われて、いちごとりに行ったんです。そうしたとこめが、ま

んだいちごがようけなかつてね、へからあの、こつほどとつて、背の子に、

「ほ、いちご食べ」ててやらいたそうすわ。そいたら、偉ったすだけんね、そこから、その、何いわいたかと思つたらね、

「ひと口にたらざるものいちご食えとは」てて、その、歌うたわいた。ほんで、親はそいから、ないのをたずねてね、子がかわいい、食べさせようと思つのをね、

「ひと口にたらぬいちご食えとは」てて、いわい、いったからね、あんましの歌やなんかでやりとりすうときは必ず勝てなかつた。その後罰があたつてね、まけて、(以下略)

西行が幼い時、母親に背負われて苺取りに出かけ、「苺食べ」と言われたのに、「ひと口にたらざるものいちご食えとは」と詠み、その罰で、その後西行は歌の勝負で勝てなかつたというのである。この他にも類話は島根県に多く見られる。例えば「一口にあるやなしやの草の実を、いちご食えとは親の無理かな」と詠んだために、上の句は良いが下の句は悪いという話もある<sup>35</sup>。いずれも幼少時の西行がとんでもない親不孝者で、苺の歌で親に反抗したために歌作りが駄目になったというふう<sup>36</sup>に、その後<sup>37</sup>の敗北・退散する西行を暗示する内容になっているのである。同じ「いちご問答」の話柄でありながら、東北と島根ではこんなにも違いが見られるのであった。

しかし右の歌を見ると、東北に伝わるものと全く同じである。

これもやはり、居駒氏が山形の資料から解したと同様の意味合いがそこにはあったと受け止めざるを得ない。ただ、伝承世界に生きた西行の修行者としての至らなさが、ここでは見事に親不孝者の幼な児西行の話として語られていると言えるのであった。なお、東北と中国地方を結ぶ伝承の糸を辿る可能性について、例会では最後に少し触れたが、本稿では紙幅を超え、言及できなかった。他日を期したい。

おわりに

西行伝承における東と西というテーマで少しでも話題性のある資料をと試みたが、これといつて新しい切り口が見つかったわけではない。しかしながら、まだ無数にその糸口は隠されていることであろう。

注

(1) 花部英雄氏「西行昔話」と西行咄」(同氏著「西行はどのよ  
うに作られたのか―伝承から探る大衆文化―」平成二十八  
年、笠間書院)

(2) 稲田浩二編著。昭和六十三年、同朋舎。「839 西行と熱田宮」  
の項による。

(3) 佐々木徳夫編。昭和六十年、桜楓社。引用文は追込みにして  
いる。

(4) 武藤禎夫編『江戸小咄類話事典』(平成八年、東京堂出版)。

- 同書には「醒睡笑」巻四「聞えた批判第十七話」、仮名草子『薄雪物語』などからの用例が示されている。『薄雪物語』には、鳥羽院の御后が花園山への野遊びの折、三羽の蝶を「あれはほんなり」と言ったのに対して佐藤憲清（西行）が「ひとつをもちどりといへる鳥あれば三つありとてもふはてふなり」と言上した逸話が記されている。なお安政二年（一八五五）成立の『地方用文章』「中巻 花戸の西行」にも染殿院の「蝶が三羽」の無理問答に佐藤憲清が「三つ飛ぶとても蝶は蝶なり」と返歌したとある。
- (5) 『北安曇郡郷土誌稿』第五輯「民謡童言葉篇」〈一 民謡地搦唄〉（昭和八年、信濃教育会北安曇部会著。郷土研究社。昭和五十四年刊の復刻版による）。
- (6) 『藤橋村史』下巻（昭和五十七年、藤橋村史編集委員会）。本文は成田守編『音頭口説集成』第三巻（平成九年、大東文化大学東洋研究所）より引用。
- (7) 『未曾民謡集』（昭和十一年、信濃教育会木曾部会編）
- (8) 白田甚五郎著『歌謡民俗記』「西行と民謡」（昭和十八年、地平社）、須藤豊彦著『日本民俗歌謡の研究』第三章 木遣歌・御船歌・踊歌の相関（平成五年、桜楓社）に具体例が掲げられている。その他、『石川県鳥越村史』（昭和四十七年、石川県石川郡鳥越村役場）には秋祭りの「獅子舞踊り」の甚句に唄われる例がある。
- (9) 白田甚五郎氏注（8）に同じ。
- (10) 「西行伝説の変容と伝播―安房・船形『西行寺縁起』とサイギョウ」（『大妻国文』第十五号、昭和五十九年）。『日本仏教文学研究』第三集（昭和六十年、新典社）所収。
- (11) 須藤豊彦氏注（8）に同じ。
- (12) 『西行伝承の世界』第一部 第四章「西行と民謡」（平成八年、岩田書院）
- (13) 『正事記』（江戸前期成立）、『新撰狂歌集』（慶長二十年（一六一五）以降成立）、『かさね草紙』（寛永二十一年（一六四四）写本）、『遠近草』（寛文年間（一六六一）〜七三筆写）、『淋敷座之慰』（延宝四年（一六七六）成立）、『地方用文章』（安政二年（一八五五）成立）、『於路加於比』（柳亭種秀著。安政六年（一八五九）〜万延元年（一八六〇）成立）といったものがある。
- (14) 『西行と伊勢の白大夫』（平成二十九年、三弥井書店）「一 熱田の西行―熱田社と天照大神―」の項参照。
- (15) 花部英雄著『西行伝承の世界』「序章 西行伝承の研究と視座」（平成八年、岩田書院）参照。
- (16) 注（2）に同じ。「838 西行と亀」、「837 西行とはね糞」の項による。
- (17) 稲田浩二編『丹波和知の昔話―京都府船井郡和知町―』（昭和四十六年、京都女子大学説話文学研究会。三弥井書店）
- (18) 昭和五十二年、弘文堂。執筆は稲田浩二氏による。
- (19) 『月刊百科』第二七九号。昭和六十一年一月、平凡社。野村敬子著『女性と昔話』（平成二十九年）所収による。
- (20) 折口信夫氏「お伽及び咄」『折口信夫全集』第十卷（昭和

- 五十一年、中公文庫）所収、角川源義氏「御伽考」『語り物文芸の発生』（昭和五十年、東京堂出版）所収、及び野村敬子氏「昔話と女性」（『岩波講座日本文学史』第十七巻「口承文学2・アイヌ文学」（平成九年、岩波書店）所収）等参照。
- (21) 佐賀県の一例は西行とするが、同県他の一例と鹿児島県のものは一休となっており、沖縄県では報告例が多いにも拘らず、西行とするものが一例もない。

- (22) 『沖繩の昔話』（昭和五十五年、日本放送出版協会）。引用文を追込みしている。

- (23) 福地曠昭編・遠藤庄治監修。昭和五十五年、大宜味村教育委員会。

- (24) 池宮正治著『沖繩の遊行芸―チョンダラーとニンブチャ―』（平成二年、ひるぎ社）に詳しい。

- (25) この話の命名は花部英雄氏による。同氏「猪苗代の西行戻り橋」『西行はどのように作られたのか―伝承から探る大衆文化―』（平成二十八年、笠間書院）所収。

- (26) 平成元年、笹岳老人クラブ連合会（宮城県涌谷町）。小堀光夫氏「笹岳の西行伝承」『菅江真澄と西行伝承』（平成十九年、岩田書院）所収より引用。一部引用文を追込みにした。昔話タイトルの「ママ」とあるのは小堀氏によるもの。

- (27) この無理問答については花部氏注（25）にも言及がある。

- (28) 小堀氏注（26）に同じ。

- (29) 「慈恩寺周辺の西行伝説―「小板地藏菩薩縁起書」（翻刻資料）を中心として―」（昭和六十三年、山形県民俗研究協議

会。後、同氏著『東北文芸のフォークロア』（平成十八年、みちのく書房）に「慈恩寺周辺の西行伝説―櫻澤坊花山家と小板地藏縁起―」と改題して所収。なお、この話は大泉与吉という方が小学生のころ、母が草履作りをしながら話してくれたのを「古里ふるさとのむか志」に書いたものという。

- (30) 居駒氏注（29）に同じ。縁起書の奥付に「享保十一年（二七二六）八月」とある。

- (31) 居駒氏注（29）に同じ。
- (32) 山口弥一郎監修。昭和四十八年、会津民俗研究会。花部英雄氏注（25）に全文の引用がある。

- (33) 花部氏注（25）による。

- (34) 昭和五十六年、島根大学昔話研究会編。

- (35) 『島根半島漁村民話集（Ⅱ）―野井・瀬崎・沖泊・多古・加賀・大芦・御津・片匂・手結・三津・小津・十六島―』（昭和五十七年、島根大学昔話研究会編）「75 西行法師の話」。  
（まづもと・こうぞう）